

リンドグレーンの青春

矢本 理子

私がまだ小学生だった頃、小田急線の経堂駅の近くに“わかくさ文庫”というとても小さな私設の図書館があった。とある一軒家に四方の壁に本棚が設えられている一室があり、世界中の絵本や児童書が所せましと並んでいた。水曜日にだけオープンするので、私と姉は自転車で乗って、ほぼ毎週そこに通っていた。思えば、大人になった今も時々読み返すお気に入りの児童書とは、この“わかくさ文庫”で出会ったのだ。

幼い頃は、ひとまねこざるやバーバパパのカラフルな絵本を飽きずに眺めていた。8歳頃からはイギリスの本を読み始め、くまのパディントンやメアリー・ポピンズ、床下のアリエッティ、ナルニアのルーシィたちが、親友だった。もちろん、バスチアンや点子ちゃん等が活躍するドイツの冒険談や、大草原の小さな家やがんばれヘンリーくんといったアメリカの児童書シリーズも繰り返し読んだ。そんな訳で、私には大好きな児童文学作家が大勢いるのだけれど、中でも、アストリッド・リンドグレーンの存在は格別である。

リンドグレーンといえば、多くの人は、赤毛をきつい三つ編にし、左右の足に色違いの長靴下をはいた、そばかすだらけの女の子を真っ先に思い浮かべるだろう。長い船旅から帰国し、(猿のニルソン氏と馬が一緒とはいえ)、たった一人で“ごたごた荘”に住んでいる自由奔放で世界一つよいピッピーは、今でも世界中の子どもたちの憧れであるにちがいない。リンドグレーンの本は多種多様で、どれも本当に面白いのだが、一番好きな話はどれと聞かれたら、私は迷わず、名探偵カッレくんシリーズと答える。常に冷静沈着で頭が切れるカッレ、明るく頼もしいアンデス、そして陽気で勇敢なエーヴァ・ロッ

タ。この3人の白バラ軍戦士たちは、毎夏思いがけない事件に巻き込まれるのだが、互いに智慧を出しあい、機敏に行動しながら、見事に難題を解決するのだ。

それにしても、リンドグレーンの本に登場する子どもたちは、何故あんなに魅力的なのだろう？ そして彼女が書き残した沢山の物語は、どのようにして生まれたのだろうか？ 実はこの秘密をひも解いてくれるかもしれない「リンドグレーン」という映画が、今冬、公開される。

南スウェーデンの小さな町ヴィンメルビーで4人兄妹の2番目に生まれたアストリッドは、愛情深い両親に守られ、仲の良い兄妹たちと、楽しく豊かな子ども時代を過ごした。10代半ばで文才を現わし、町の新聞社で働き始めたアストリッド。しかし彼女が才能を開花させ始めた矢先、予期せぬ出来事が生じる……。実際、10代後半から、彼女の生活は一変する。望まぬ妊娠、親との軋轢、進学したストックホルムで過ごした孤独な日々、デンマークでの出産など、様々な試練が続いたからだ。しかし不屈のアストリッドは、簡単には諦めない。持ち前の強い意志と行動力で、一つ一つの問題に対峙していく。デンマークに里子に出した息子ラッセと会うために、何度も海を越え、結婚を断わり、新しい職や家を探し、やがてラッセを引き取り、一人きりで育て始める……。

映画を観て、20世紀初頭のスウェーデンの保守的な社会状況やデンマークの先進性に吃驚すると共に、アストリッドが、現代の女性たちの一部が抱えている難問に、既に一世紀も前に立ち向かっていたことに、心底驚いた。彼女が後年、人間味溢れる優れた作品を数多く生み出した背景には、あの長くて辛い青春時代を自力で切り抜けた体験があったのだ。そして窮地のアストリッドを救ったのは、彼女が幼い頃から身につけていた、汲めども尽きぬ豊かな想像力と、ユーモア精神だったのだ。

(やもと たかこ：岩波ホール)

いい本が買えないのはどうしてですか？

～子どもの本の品切れ問題は、今～

手島 一恵

復刊運動とのかかわり

四半世紀以上前の1989年、当時4歳だった我が家の長男は、図書館から借りた、岩波書店の『こぎつねルーファスのぼうけん』が大のお気に入りとなった。何度も図書館から借りることを繰り返し、ついに「買って」と言い出したとき、その本は品切れとなっていた。それを長男に説明すると、彼は涙を流し、「いい本だから作ったのに、どうして売ってくれないんだろう？」と、落ち込んだのはつかの間、すぐさま再販してもらおうべく、岩波書店にこう訴えたのだった。

「ぼくはルーファスが大好きです。ずっとおうちに置いて読もうと思ったら、買えませんでした。いい本が買えないのはどうしてですか？また作って、売ってください」。

その後、めでたく長男は、岩波書店のご好意で『こぎつねルーファスのぼうけん』を手に入れることになった。しかし、ずっとおうちに置いておける本を入手し、喜んだ直後に、彼はひどく冷静な口調で私にこう言い放ったのだった。「じゃあ、お母さん、他の子はどうするの？」。

この一言は、当時児童図書館員だった私の心にぐさりと刺さり、その後、私は1990年から5年間、＜子どもの本の品切れ・絶版を考える会＞の活動にかかわることになったのだった。この会は活動期間中に、岩波書店・福音館書店等へ60点余の子ども本の復刊を要望し、その復刊を実現した。

この会の活動後、自分の中に「子どもに手渡したい本が、手渡したいときに手に入るとは限らない」という、反面教師的な、妙な強

迫観念がますます強くなってしまい、何かのタイミングで復刊本が出ると、まとめて購入してしまうということが癖になってしまった。

それは、児童図書館員としてでもあり、また、図書館の現場を離れ、ライフワークとして子どもと本を結ぶ活動を続けていく中でもであった。

実際、「かあさんねずみがおかゆをつくった」をちょうど手渡したいと思う子どもがいる時期に、その本が品切れでは、手渡すことができない。かといって、それに代わる絶妙な絵本があるのか、というジレンマに、毎回陥ることになるのだ。福音館書店さん、他の1冊と入れ替えて、「かあさんねずみがおかゆをつくった」を、恒常的に入手できる1冊にしてくださいと、この場を借りてでもお願いしたいくらいである（ちなみに、ここが微妙なところで、福音館書店〇〇周年記念・限定復刊と銘打って、数年に一度は復刊させています。なので、そのタイミングで復刊本をまとめて購入しておくわけですが、子どもたちに手渡している間に、当然ストック本はなくなります。そして、次の復刊のタイミングまでの間に、この絵本を手渡したい子ども達は成長していってしまうわけです）。

最近の動きとしては

岩波書店では、児童書編集部が「やかましネットワーク」という小冊子を発行している。2019年7月1日発行の第58号には、「復刊アンケートのお願い」という囲み記事があり、復刊アンケートのリストが同封されていた。記事によると、来年、岩波少年文庫は創

刊70周年を迎える（岩波書店では、他にも少年文庫創刊70周年関連でいろいろと動いています）。復刊についても検討中で、その参考に今回、アンケート用紙を同封したとのこと。「いま、子どもたちにぜひ読んでもらいたい」という観点で、声を聞かせて欲しいとのことであった。

リストは、2000年以降に刊行した書目から編集部で選んだ復刊候補26点。最後に上記以外の作品欄があり、タイトルを書けるようになっている。この26点の候補から3点まで選ぶことができるのだが、私はそれを選ぶのに1週間悩んだ。出版社の周年記念での限定復刊という形でも、ある作品が復刊され、ある子どもと出会えば、その子にとってかけがえのない1冊になる可能性があるのだ。

そう考えると、復刊してくださいと要望する場合にも、めでたく復刊されて子どもたちに手渡す場合にも、自分がその本の本当の魅力を知っていなければならないのだ。今の子どもたちに、ここがこんな風に共感される、こんな風に普遍的なところがあるのだと、具体的に子どもたちに手渡している大人が、実感できているのだろうか。現在、復刊された作品の楽しさを、図書館や学校では、どこまで読者である子どもたちに届けることができているのか。私自身も含め、読み継ぐことの難しさを感じる。そして、司書職制度、指定管理制度等避けて通れない、堂々巡りに陥ってしまうのであった。

あらたな試み

現在、公益財団法人東京子ども図書館では、「絵本の庭へ」・「物語の森へ」という2冊の児童図書館基本蔵書目録を刊行している。2017年5月に刊行された「物語の森へ」では、戦後の児童文学から約1,600冊を選びすぎているが、このうちの半数以上が入手不可だった。このことから、「今ふたたび、この本を子どもの手にし！」と銘打った復

刊キャンペーンを2017年7月から2020年7月まで行っている。東京子ども図書館が挙げたリストの中から、各自が「これは」と思う本に投票するもので、同じ本には1回しか投票できないが、違うタイトルにはいくつでも投票できる。また、一言コメントで、おすすめポイントや子どもの反応など、具体的な声も届けられる形になっている。ちなみに、2019年9月末時点での投票総数は2,924票で、全国からさまざまな形で票が寄せられている。

この取り組みと並行して、「物語の森へ」の刊行を記念した関連イベントも多数行われている。お茶を飲みながら収録作品を読む会や、ブックトークを聞いて楽しむ会など、収録作品にさまざまな形で出会える試みが目白押しで、品切れ本にも自然と出合える工夫があって楽しい。

私がかつて活動したく子どもの本の品切れ・絶版を考える会でも、復刊を要望する作品が、いかに楽しい本であるか、どんなに今の子ども達を楽しませるかを共に分かち合うために、く品切れ・絶版の本を楽しむ会を開催した。品切れ・絶版の本の魅力を心から楽しむことによって、「どんなに楽しい本でも、背表紙を見せて、棚に飾ってあるだけでは、子ども達には届かない。あらゆる機会を捉えて、その本がどんなに面白いかを伝えていく工夫が大切だ。」と実感することができた。

東京子ども図書館では、2020年7月の復刊キャンペーン締め切り後、具体的にどう運動していくのかは、今のところ未定とのことである。子どもを含む生の声を集約し、出版社に届ける道筋の中で、心ある出版人と協力して、1冊でも多くの品切れ本が復刊されることを大いに期待し、そのために自分にできることを探していきたいと思う。

いつの日か、子どもに手渡したい本は、いつでも手渡せる状態になっている、と言えるように。

（てしま かずえ：子どもと本のボランティア）